



中村 裕太 《イニシエヲ 月ニトハルル ココチシテ フシメガチニモナル コヨイカナ》
陶、2024年
写真 | 麥生田兵吾

#010 中村 裕太 月ニトハルル

10回目を迎える今回のGinza Curator's Roomは、美術家で京都精華大学准教授の中村裕太氏をお迎えします。本展「月ニトハルル」は、大田垣蓮月の興味深い逸話から着想を得ました。中村氏は、近代の工芸文化における模倣に注目しつつ、版画家で法廷画も手掛ける松元悠と、自身の作品を通して、現代における模倣のありようを考えます。

Artists

中村 裕太 松元 悠 大田垣 蓮月 石黒 宗麿 河井 寛次郎 濱田 庄司
バーナード・リーチ 八木 一夫

思文閣銀座

2024.11.29 Fri. — 12.13 Fri. (日曜休廊)

10:00 — 18:00

協賛 野村證券株式会社

Curator's Statement

月二トノリル

中村 裕太

いにしへを月にとはるる 心地して ふしめがちにも なる今宵かな

大田垣蓮月

幕末から明治の歌人・大田垣蓮月（1791-1875）は、生活の糧として手づくねした器に自らの歌を釘で彫り込んだ陶器を拵えていた。京都の土産物として好事家からも好まれていたため、当時から贋作も多く出回っていた。

ある日、その模倣を試みていた商人が蓮月宅を訪ね、「どうしても文字がうまく書けません」と打ち明けると、「お安いこと」と商人が持参した器に自らの歌を彫り、おまけに手本として自らの陶器を手渡したという。

蓮月から模倣について問われた心持ちがする中村裕太と松元悠は、いくつかの模倣にまつわる出来事を紐づけて検証していくことで、伏し目がちにならない今日の正しい模倣を会場でお見せしていく。

Curator / Artist

中村 裕太

美術家。1983年東京生まれ、京都在住。2011年京都精華大学博士後期課程修了。博士（芸術）。京都精華大学芸術学部准教授。〈民俗と建築にまつわる工芸〉という視点から陶磁器、タイルなどの学術研究と作品制作を行なう。文献調査やフィールドワークによる観察をもとに仮説を積み上げ、自らの手で実験した造形物を通して、近代以降の周縁的な工芸文化を考察していく。近年の展示に「チョウの軌跡 | 長谷川三郎のイリュージョン」（京都国立近代美術館、2023年）、「耽奇展覧」（ギャラリー小柳、2023年）、「第17回イスタンブール・ビエンナーレ」（バリン・ハン、2022年）、「眼で聴き、耳で視る | 中村裕太が手さぐる河井寛次郎」（京都国立近代美術館、2022年）、「万物資生 | 中村裕太は、資生堂と を調合する」（資生堂ギャラリー、2022年）、「MAMリサーチ 007：走泥社—現代陶芸のはじまりに」（森美術館、2019年）、「あいちトリエンナーレ」（愛知県美術館、2016年）、「第20回シドニー・ビエンナーレ」（キャリッジワークス、2016年）など。著書に『アウト・オブ・民藝』（共著、誠光社、2019年）。

<https://nakamurayuta.jp/>



写真 | 麥生田兵吾

Artist

松元 悠

版画家、美術家。1993年京都府生まれ。2018年に京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻版画を修了。

2021年から関西をベースに法廷画を担当する。マス・メディアが報じる出来事（事件）の周縁に赴き、そこで得た情報からリトグラフ技法を用いた版画を制作している。

近年の展覧会に、個展「サラバ化物（憶測の追跡）」茨木市立ギャラリー／2024、

「VOCA展」上野の森美術館／2024、企画展「出来事との距離ー描かれたニュース・戦争・日常」町田市立国際版画美術館／2023、個展「越後妻有MonET 連続企画展Vol.2松元悠『版画報、道が動く』」越後妻有里山現代美術館 MonETなど。ほか、展覧会企画に「漁師と芸術家～琵琶湖を問う、琵琶湖を読む～」大津市立和邇図書館／2022がある。



写真 | 三輪泰生



松元 悠《血石と蜘蛛（高畑山／コレヒドール島）》
リトグラフ、かきた紙、650×550mm、2019年



大田垣 蓮月 水指
巾14.3×高18.4 cm
富岡鉄斎箱書

思文閣銀座

〒104-0061 東京都中央区銀座5丁目3番12号 壹番館ビルディング

<https://gcr.shibunkaku.co.jp/access/>

TEL: [03-3289-0001](tel:03-3289-0001)

営業時間: 10:00 — 18:00

日曜休廊

本企画に関するお問い合わせはtokyo@shibunkaku.co.jpまでお願いいたします。



SHIBUNKAKU
GINZA

思文閣